

6. 自磨の時間 遠山郷 ESD 塾 参加学生からの報告

小山 こまち

「ESD とはなにか」というかねてからの自分の疑問の答えに、今回、自磨の時間（遠山郷 ESD 塾）を通して近づけたような気がします。恥ずかしながら私は、環境教育学研究室に所属していながら、ESD については本で得た知識程度にしか理解していませんでした。しかし、今回の遠山郷の実践を通して、個人差はあれ学生一同、ESD の学びを体感することができたのではないかと思います。

ESD (Education for Sustainable Development) は、その名の通り持続可能な開発のための教育であり、既存の教育の在り方に問われない学びを追求していくことが求められます。『新しい環境教育の実践』（朝岡幸彦編著 高文堂出版）では、具体的に ESD に教育を再設定する際の原則がこのように書かれています。「持続可能な開発の探求は、地域社会によってなされるべきで、（中略）『環境』『経済』『社会』の複雑な相互関係を地域社会の中で捉えるための「知識」と、その中で持続可能に生きるための「技能」、そして目指す方向性を与える「価値観」と「展望」の習得に力点が置かれる。」以下、私が自磨の時間（特に学習の時間）を通して、この原則に則っていたと感じることを記述します。

私が担当した中学生との自習の時間は、一見普通の、学校の授業の補修のように見えるかもしれません。しかし、その内容は、一般的な認識とは一線を画すものだと感じました。例えば、生物の質問に答える際、遠山郷には植物や動物はどんなものがあるのかと逆に質問をすることで、より興味を持って話を聞き、「じゃあ下栗イモは、根っこじゃないの？」など、自発的に質問をしてくれました。またそこから派生して、「最近あまり外で遊ばない」などの自分たちの暮らし方について話してくれ、自分たちは地域でどんな遊び方をしているのか、遠山郷で自慢出来る場所はどこか、どんなお店が欲しいかなど、子供たち同士で遠山郷について改めて話す機会になっていました。今振り返ると、生物の学習を通して、地域の自然（環境）と自分たちの関係や、自分たちの地域の楽しさや足りないところを考えるきっかけになり、理科の知識だけではなく、新たな価値観に触れることができたと考えられます。また、教えている大学生たちも、遠山郷の子供たちの暮らしを本人たちの口から直接聞き、都内で生まれ育った自分達との違いや同じところを見つけることで、社会の構造に関する視野を広げることができました。

3 日間という短い時間かつ初めての試みの中で、ESD の目的を完遂したとは言えませんし、他の学生が述べているように、問題点や課題も多く浮かび上がりました。しかし、今回得られた大学での座学では到底得ることが出来ない学びは、これからの遠山郷 ESD 塾の実践において生かすことができると確信しています。今回の経験をもとに、来年度はさら

に地域の方や子供たちの意見も取り入れた、より遠山郷の文化に適した ESD 塾の実現に向けて、他大と連携して奮闘したいと考えています。

(こやま・こまち 東京農工大学農学府修士 1 年)

杉森 天真

1. 学習の時間

私は低学年の担当として ESD 塾での活動を行った。

初日は低学年ということもあって、打ち解けてから宿題や自習に取り組むために、全体でアイスブレイクを行なった。場所を移動後に、低学年とその担当だけで自己紹介を含んだアイスブレイクをもう一度行おうと考えたが、ばらばらに移動し遊び始めてしまい、そのままほぼ 1 日が遊びで終わってしまった。また、参加者の一人が部屋を出てどこか別の場所に行ってしまうと、残された人の負担がさらに大きくなり、より全体に意識が行き届かなくなってしまった。

2, 3 日目は、低学年の担当が増えた影響もあり、1 日目よりも「自磨の時間」で一人一人にしっかりと対応することができた。両日ともに、2 年生の算数、国語と謎解きドリルのようなものの自習サポートを行った。算数では 2 ケタの引き算に大きく躓いていたが、10 の位から 1 の位に借りてくるという計算をどのように言えば伝わるのかが思い浮かばず苦戦した。自分たちには当たり前になっていて考えたこともないようなことが疑問となり躓いてしまうことが難しく感じた。国語では漢字の穴埋め問題で漢字が分からなかった際に答えを直接すぐに教えていいのか、答えを言わないとしたらどのようなヒントを出すべきなのか悩んだ。謎解きドリルでは、頭のやわらかさを問うようなクイズが多く質問されて、すぐに回答ができなかった。しかし、答えが分かりどう教えようか考えたときに自分も一緒に謎解きを考えていたため考え方や躓いている場所が分かり伝えやすかった。

3 日間の学習の時間を通して遠山郷の子どもたちの集中力の高さに驚いた。初日は、はじめから遊んでしまったため收拾がつかなくなってしまったが、2・3 日目は集中して自習が行えており勉強する習慣がついていることが分かった。

2. 自然学習の時間

自然体験学習では、自分のペア 1 人と午前中の自磨の時間に川と一緒に生物観察を行う約束をしていた男の子 1 人と、川での活動を行った。私のペアは川で遊んだことがなく、水に腰以上つかれることをいやがっていたので、川に対しての恐怖感が少なくなり興味を持つまでに時間がかかった。最終的には、一緒に回っていた男の子が川を楽しんでいたため、その行動に興味を持ち同じ行動をして川を楽しんでいた。

自然学習の時間では箱めがねと網が用意されていたが、今回の自然学習のフィールドでは昆虫や小魚なども少なく2つの道具をあまり使う機会がなく荷物となっていた。さらに、生物観察を行う約束をしていた男の子がおり、午前中の休憩時間に河川の生物について図書館で予習していたため、残念そうな表情をしていた。この2つの出来事があったため自然学習のフィールドに少し不満が残った。

(すぎもり・てんま 麻布大学生命・環境科学部環境科学科 3年)

草川 志弥

今回このような機会に巡り合い、参加することにより感じ考えたことを2つに分けて述べたいと思います。

1つ目は遠山郷での生活と人々についてです。この活動を行うにあたっての宿泊場所として「ゲストハウス太陽堂」に3泊しました。自分はこのようなゲストハウスというところに泊まった経験は無く、とても新鮮で新たな体験をすることが出来ました。ゲストハウスには、他大学の学生や一般の方も一緒に泊まり、夜の自由時間に話をする事ができたため、メインの活動以外の場でも交流を深めることが出来ました。太陽堂での交流もありましたが、もちろんのこと遠山郷の方々自分達のことをとても温かく迎えてくれました。活動をしていく中で話をしていくと、ある小学生の親が肉屋さんをやっていることを聞いたりしました。こういうところから地域が小さいなりにコミュニティはあまり大きいとは言えないと考えられました。その分、住民同士の連携や協力関係がつながり深くなるため、都会で無くなりつつある関係が残っているのだと思ってはいましたが、遠山郷という場所に行くことで改めて感じる事が出来ました。

2つ目はESD塾というタイトルでの活動内容です。今回の活動内容として主たるものは学習活動の補助であり、その活動は自分がアルバイトとして塾講師をしているためうまくできたのではないかと考えています。また担当学年も小学生は高学年・低学年ともに担当しましたが、生徒のやる気の持続の仕方や引き出し方を活かすことが出来ました。ESD塾という名前の通り、学習活動と体験活動の両方を行うことは、今回のプログラム上ではしっかりなされていたのかなと考えています。また反省点としては、プログラム自体の内容ではなく、生徒のやる気という点が課題になると考えました。各プログラムの意味を自己解釈して運営をおこなうことが出来たので、プログラムの内容や生徒がどう感じ取ってくれたかという点においてはうまくできました。このような機会をいただき参加できたということで遠山郷という地域を知ることが出来、自分の指導能力や教職で学んだことを活かしてよい経験となったため参加できうれしく思います。

(くさかわ・ゆきや 麻布大学生命・環境科学部環境科学科 3年)

川島 優大・関 玲那

1. はじめに

2019年8月10日（土）～8月12日（月・祝）にかけて、長野県飯田市遠山郷地区（上村・南信濃地区）において「自磨の時間 遠山郷 ESD 塾」が開催された。今回の活動内容の報告とともに、活動の成果や今後の展望についてまとめる。

2. 概要

本事業は立教大学 ESD 研究所と飯田市との間で結ばれた ESD 地域創生連携協定に基づく活動の一環として行われた。「自磨の時間 遠山郷 ESD 塾」に関しては、今回が第一回目の試みである。飯田市遠山郷地区の2つの公民館（上村公民館・南信濃公民館）と立教大学 ESD 研究所が協力し、同地区の小・中学生を対象とした ESD 塾（補習や自然体験活動等）を地域の方々や協力大学（2019年は松本大学・麻布大学・東京農工大学）の教員や学生により、生徒児童らの夏休み期間中に実施された。また、同地区の地域おこしについて地域住民との意見交換を行った。

3. 活動の詳細

立教大学からは、阿部治教授（立教大学社会学部・同研究科教授、同 ESD 研究所長）と、川島、佐藤、関（社会学部現代文化学科阿部治ゼミナール3年）の4名が参加した。

1 日目は、公民館において他大学の学生や教員、地域の方々と顔合わせを行った後、地区の小・中学生とともに開校式を行った。小学校低学年・小学校高学年・中学生と3つのグループに分かれ、学生はそれぞれ配属されたグループの子供達を担当した。子供達には各自夏休みの宿題や自学の道具を持参してもらい、学生は子供達の学習のサポートを行った。午後には料理実習が開かれ、遠山郷の伝統料理である「三角寿司」づくりを地域の方々の指導のもと行った。子供達が下校した後に地域住民との交流会があり、教員や学生たちは地区の小学校や公民館の方々と交流を深めた。

2 日目には前日の反省からバディ制度をとり、子供達それぞれに対して担当学生を決めた。午前中には前日同様に自主学習を進め、午後には屋外での自然体験活動を行った。自然体験活動にはキープ協会の増田氏をお招きし、川での生物観察や川流れ等の川遊びを楽しんだ。

3 日目は最後の自主学習の時間の後、閉校式が行われた。3 日間の活動や思い出を振り返り、子供達には表彰状やメッセージをプレゼントした。

また、3 日間とも下校の前に「振り返りの時間」が設けられ、子供達にその日学習したことや感じたことを振り返り、ノートに記入してもらった。学生もノートに子供達の様子

や成果などの報告を書き込み、子供達には帰宅後保護者の方からコメントをもらうように伝えた。3日間、僅かながらではあるが、子供達とだけでなく家族との交流も生まれた。

4. 活動の成果

今回の活動を通し、学生は普段関わることのできない小中学生と交流を深めることができた。また、地区の小中学生も大学生と関わることは少ないため、お互いにとって貴重な交流の場となった。他大学の学生や教員、地域の人々と関わる時間も多く、活動外の時間に関しても有益な時間を多く過ごすことができた。

3日間という短い期間であったが、子供達にとって新たな学びと発見の場となり、何より充実した表情を見ることができた。最終日に多くの子供達が「来年また参加したい」と伝えてくれたことで、達成感と手応えを感じることもできた。子供達に楽しく参加してもらえたことは一つの成果であると思う。

また、麻布大学の小玉教授や公民館の宮田氏を中心に、学生から出た意見を柔軟に取り入れ動くことができた。新たに反省会の時間を設ける、スケジュールを変更する等の迅速な対応ができたことは今後にも繋がると感じる。次回のESD塾までの間にも学生が集まる計画が数回あり、複数の学校の学生が中心となって活動を進めていくことができることはこの活動の魅力である。主体的な学びの場として今後も積極的に取り組んでいきたい。

5. 今後の展望

今回は初めての開催ということもあり、荒削りな内容も多く、改善の余地があると感じた。事前に活動方針や内容に関する情報共有が不足していたこともあり、手探り状態で活動を進め、反省点も複数出てきた。

まず、対象年齢が小学校低学年から中学生とかなり幅広いため、同じスケジュールの中で自習を進めることに難しさがあった。特に低学年に関しては、集中力が持続しない子や、宿題を終えると勉強道具が無くなる子が数人出てしまった。学習以外にも、全員同じ教室で行える工作などを取り入れることができればと思う。

今回は学習の時間、自然体験活動どちらについても世代ごとのグループ別で固まることが多かったが、今後は他学年とも積極的に関わられるようなプログラムや、学年別に難易度を変えたプログラムを設定していけると良いのではないかと思う。来年度は今年度よりも参加人数が増加する可能性も指摘されている。公民館内だけでなく駐車場や他の使用可能な施設も利用しながら、同時進行で今回より多くのプログラムを組むことで、さらに充実した活動にしていきたい。

(かわしま・ゆうた 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)

(せき・れいな 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)